

# 胃に穴を開けて 2年長く生きるか 60日で餓死するか

「胃ろう。なんかで生き永らえるより、自然のうちに死にたい。ご飯が食べられなくなったら、人は死ぬ。それは、当たり前のことです」

全国介護者支援協議会理事長の上原喜光氏はそう話す。

だが、それをさせてくれないのが、日本の高齢者医療なのだ。

内閣府アンケートによると、「延命治療を望まない」人は約9割。しかし、実際は胃に穴を開け、チューブから直接、流動食や薬を送り込む「胃ろう」が、全国で40万人に行われている。それ

で、高齢者の医療費が増えると不安をあおるのだから矛盾している。

札幌西円山病院のデータ（死亡時年齢86.2歳）では、胃ろうを行った患者の平均余命は827日。同じく点滴のみの患者なら196日だった。

では、何もしなかったら？ わずか60日で息を引き取ったという。

「何もしないということは、つまり、餓死ということ。胃ろうをやれば、確かに2年ほど長く生きられます。どちらを選ぶかは、その人の考え方です」とは、医療問題に詳しいジャーナリストの塩田芳享氏。



ドイツでは、75歳を越えたら積極的な治療を行わず、それでも治療を望む人には自己負担を多くさせようという極論まで出ているという。

「団塊の世代と話をするとき、ほとんどが〈自分は延命治療をしない〉と決めています。それは親を無理に延命させてしまった反省もある。もちろ

ん、治療の可能性があれば積極的に治療すべきでしょう。私は苦しいのだけ避けられれば、無駄な治療は望みません」（上原氏＝前出）

2038年には、年間死亡者数はピークの170万人になる。今から死に方を決めておいた方がよさそうだ。